

## ちいさな手

## 臨時号：九州地震被災者支援ボランティア報告



## 「茫然と立ち尽くす人々」に寄り添う

熊本聖三一教会の聖堂で寝泊まりさせていただき、7月4日(月)～8日(金)ボランティアに参加することができたことに感謝いたします。4月14日、16日の2度にわたる大地震の傷跡は、未だ生々しく、この度訪れた、特に益城地区の被災された方々の復興は、長く続いた余震や、最近の大雨などの影響もあり、復興はまだまだこれからという印象です。一方、車でほんの30分ほどの熊本市内、大通りな

どは、まるで何事もなかったかのような様子で、その格差が大きく、それだけに、被災地と被災された方々を取り残されてしまうような危惧を抱きました。そのような方々に寄り添いながら、ボランティアセンターとして、様々な依頼に応えるべく、共に祈りつつ、活動を続ける、九州教区と熊本聖三一教会の働きに敬意を表します。具体的なニーズに応じて、ハードな仕事をこなすことと同時に、「茫然と立ち尽くす人々」に寄り添うことによって、少しでも、心が励まされ、歩みだすきっかけになればと思います。実際、私自身高齢者であり、仕事の役に立つかどうかと不安もありましたが、できる限りの仕事をしながら、言わば年の功で、休憩時間などに、「地震の時どうでしたか」というように声をかけさせていただき、思いがけずいろいろとお話を伺うことができ、気持ちがつながるようなこともありました。熊本聖三一ボランティアセンターの働きのために祈り続けていきたいと思うのです。



(報告者：司祭 ヤコブ 三原一男)



## 被災者を「孤立させない」ため

6月27日から7月1日まで、4泊5日の日程で熊本聖三一ボランティアセンター(熊本聖三一教会内)において九州地震被災者支援のボランティア活動に参加しました。ちょうどその時期に九州地方では大雨が続

いており、ボランティア活動には少し厳しい状況が続いていました。しかし、どんな状況であれ、地震による被災の上で、大雨によって更なる災害の危機に遭っている方もいらっしゃるのでもう一度経験が無かった雨の中でのボランティア活動になりました。



特に活動の中で私が印象的だったのは被災者支援室が力を入れている「おかず配りの訪問」の活動でした。被災された方々の所を直接訪問し、おかずを配って被災の状況や最近の様子などを聞きながら何か力になれるものはないかを探ることです。被災者の方々は最初は中々自分たちの「必要」を話してくれないが、関係を築いていく中で少しずつ話してくれると言います。そしてその方を通してまた別の方の「必要」に繋がることもできます。被災者支援にはまず被災者との関係を築くことが大事ということに気がつきました。

被災者の方々は2回目の本震の時にいわゆる「やる気」を無くした方が多いと言います。ある程度余震が静まっている今、やっといろいろなことが動き出した感があります。被災者との関係を深めながらこれからまた多くの「必要」が伝わってくるでしょう。被災者支援の働きはこれからが始まりかも知れません。（報告者：執事 テモテ 姜炯俊）



## 「やる気」の喪失は根深い

7月11日(月)～15日(金)にかけて熊本聖三一ボランティアセンターを拠点として被災地での復興支援活動に携わることができました。

4月16日の本震発生から3ヶ月が過ぎましたが、日が経つにつれて、世間の被災地への関心が薄れつつあり、現地に赴くボランティアも減ってきているように感じた。近頃、めつきりニュースでは熊本地震に関するニュースが少なくなったが、実際に被災地を訪れるとまだまだ倒壊した建物がそこら中にあり、行政の手が追いついていないように感じた。

今回のボランティア期間中、ほぼすべての日程で激しい雨が降ったため、倒壊・破損したブロックや瓦の除去作業が中心で被災者の方とは直接、お話しをする機会はありませんでしたが、2度目の地震、つまり本震発生による「やる気」の喪失は根深いものがあり、まずは瓦礫除去、ブロック塀の撤去、植木の剪定などを行うことによって被災者お一人お一人に、元気を取り戻していただくという形の寄り添い方がしばらくの間は求められているのではないかと感じている。



例年では九州はとつくに梅雨明けの時期に差し掛かっている時期であるが、連日の雨により、仮設住宅の建設も予定より遅れており、今でもテントやビニールハウスで暮らす方々が多くおられる現状に胸をいためている。我々ができることはわずかであっても、継続的に協力しあい、支援活動を続けて行くことが今後も望まれるのではないだろうか。

(報告者：執事 パウロ 窪田真人)

なお、今回のボランティアには、報告者の他に司祭ルカ片山謙師、司祭バルナバ吉川智之師、司祭ラファエル宮崎仁師も参加しています。

(文責：協働主事会)